

よこて ネット

秋田県立横手支援学校
支援部報 No. 2

令和元年7月3日

「個別の指導計画」の活用について

教諭（兼）教育専門監 菅原 咲希子

4月から横手支援学校に赴任しました菅原咲希子です。横手支援学校には11年ぶりの勤務となりますが、このたびは教育専門監としてお世話になることとなりました。微力ですが、支援を必要としている子どもたちを支える皆様の仲間（チーム）に入れていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、新年度がスタートして3か月。今回は、特別な支援を必要としている子どもたちについて作成している「個別の指導計画」の活用場面をいくつかお伝えしたいと思います。



職員間の共通理解に・・・校内委員会、ケース会議、学年部会等で

- 担任や交流学級担任、通級指導教室担当、教科担当等関係する職員が、子どもの実態や目標、手立てを共通理解することができます。このことが、一貫性のある指導・支援につながります。
- 関係した職員で、目標の内容や手立て等を協働して出し合ったり、客観的に評価したり、次の指導・支援を複数の目で考えたりすることが、チームで取り組むことにつながります。

よりよい指導・支援に・・・日々の生活や学習場面で

- 「個別の指導計画」の目標や手立て等を確認して、単元や授業の個々の目標設定などに生かして実践します。単元や授業の評価では、学習状況や達成度の評価（子ども側の評価）、指導の評価（目標や内容、手立て等の指導者側の評価）の両面からの評価を行います。そして、次の実践に生かすというPDCAサイクルで計画を見直すことで、指導・支援の改善につながります。
- 指導の記録や教科の指導計画、週案等に添付してすぐに見られるようにしたり、短い期間で計画を見直す機会を設けたりすると身近なものになり活用しやすくなります。

新年度へのスムーズな移行のために・・・進級、進学先等への引継ぎで

- 新年度に向けて、子どもの実態や有効な支援等を引き継ぐことで、途切れのない継続的・発展的な指導が期待できます。
- 子どもたちにとっては、新しい環境の中で、学校生活のスムーズなスタートにつながります。また、前年度の内容がきちんと引き継がれていると保護者も安心します。

本人・保護者との共通理解に・・・面談等で

- 「目に見える形」でやりとりができ、学校と家庭が同じ方向を向いて、一貫した支援で子どもを支えることができます。また、評価時には、相互に成果や課題などを確認し合うことができます。
- 子ども自身が、自分が何を目標として学習しているのかを理解することで、指導効果が上がったり、自己理解が促されたりします。また「～ができるようになった」ことで自信や意欲につながります。

「個別の指導計画」をすぐに取り出して見ることができるところに置いて、大いに活用しましょう。

